

Title	大垣方言における用言の形態音韻論的分析：音便形と補助用言のアクセントを中心に
Sub Title	A morphophonological analysis of verbs and adjectives in the Ogaki dialect : focusing on the accents of the ombin form and the subsidiary verbs and adjectives
Author	吉安, 良太(Yoshiyasu, Ryota)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.120, (2021. 6) ,p.131 (110)- 147 (94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01200001-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大垣方言における用言の形態音韻論的分析

— 音便形と補助用言のアクセントを中心に —

吉安 良太

はじめに

岐阜県大垣市で話されている大垣方言は、東日本方言と西日本方言の境界線上で行われており、「アクセントは東日本式、文法は西日本式」（杉崎・植川（2003）pp.354-355）と言われるように、東西方言の特徴を併せ持つ方言である。とりわけ同方言のアクセントは、東日本の最西端で行われている東京式アクセントであり、記述価値が高いと言えよう。

筆者は、大学進学までの18年間を大垣市の旧城下町域で過ごした、大垣方言¹の母語話者である。修士論文である吉安（2021）においては、大垣方言における用言の活用とアクセントについて、形態音韻論の見地から分析と記述を行った。その内容のうち、音便形と補助用言に見られた特異なアクセント現象は、形態音韻論の理論構築にとって重要な意味を持つと考えられる。本稿は、大垣方言における用言の活用とアクセントについて概観した上で、そうした特異な現象について、改めて記述と検討を行うものである。なお、本稿では大垣方言は山括弧で、その標準語訳は丸括弧で示す。

第1部 概観

始めに、大垣方言における用言の活用とアクセントを概観する。なお、大垣方言の音韻体系については、吉安（2021）pp.3-6で検討しているが、結論的には標準語の音韻体系と同様と考えて差し支えない。したがって、音韻表記は、標準語

等で広く用いられているものを準用する。また、本稿の扱う大垣方言のアクセントは東京内輪式に分類されるものであり、アクセント核（下がり核。「¹」で示す）の有無とその位置のみが有意な体系である。

1. 語という単位

具体的な記述の前に、本稿における語という言葉単位を明確にしておきたい。本稿における語とは、屋名池（2018）の「〈語〉」であり、次のような特性を持つ。

I. 単独使用が可能

II. 他の単位と識別するためのアイデンティティ表示として

II. 1. 言語単位列の中でもちいる時は

II. 1.1. 「アクセント単位」である

II. 1.2. 「最小呼気段落」である

II. 2. 述語内の単位列における、語としての「助動詞」の位置づけ

II. 2.1. いろいろな品詞に後接できる

II. 2.2. テンス要素より後ろに現れる

（屋名池（2018）pp.118-119（取意））

これに従うと、例えば学校文法において4単語と分析される〈書かせられた〉は、これ全体で1語である。屋名池（2005a）によれば、これは語幹〈kak-〉、接辞〈-ase-〉〈-are-〉、語尾〈-ta〉という4つの形態素が結び付いたものとして分析される1語の動詞である。したがって、本稿における動詞や形容詞には、このように複雑な形をしたものも含まれる。

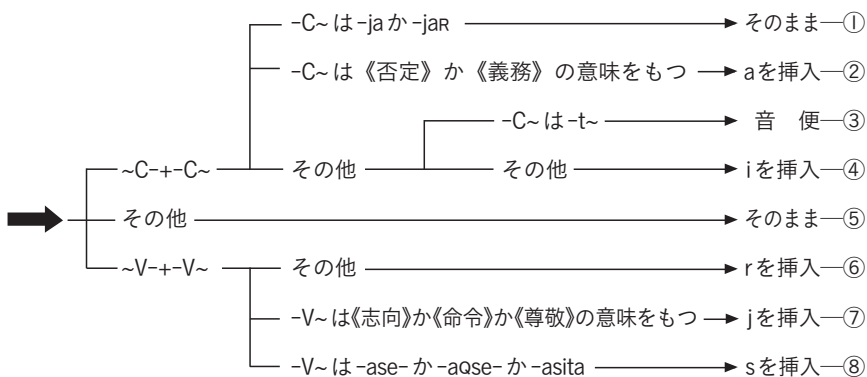
また、アクセントについては、原則としてアクセント単位でもある、この語という単位ごとに記述を行う。ただし、語という単位とアクセント単位が一致しないと考えられる場合もあり、後に検討する。

2. 動詞の活用とアクセント

本章では、吉安（2021）pp.28-38およびpp.49-57を元に、大垣方言における動詞の活用とアクセントを概観する。分析と記述の手法については、活用に関して

は屋名池（2005a）pp.71-76、アクセントに関しては屋名池（1992）pp.35-46および同（2005b）pp.78-79に基づいた。

2.1. 動詞の活用 動詞の活用の機構は、動詞を構成する形態素（語幹・接辞²・語尾³）の境界に挿入される音素を決定する（音便形は別機構）規則の集まりとして記述される。その規則に従って、形態素同士の境界ごとに繰り返し音素が挿入されていくことで、動詞は形成される。その規則を屋名池（2005a）p.75にならって流れ図の形で整理すると、次のようである。図中のCとVはそれぞれ子音と母音を表し、例えば〈-C-〉は子音で終わる形態素、〈-C~〉は子音で始まる形態素を指す。



例えば、子音語幹〈kak-〉に否定語尾〈-n〉が結び付けば、②のパターンに従って /a/ が挿入され、〈kakan〉（書かない）という動詞が形成される。また、母音語幹〈tabe-〉に使役接辞〈-ase-〉が結び付けば、⑧のパターンに従って /s/ が挿入され、〈tabesase-〉（食べさせ-）という形態が形成される。なお、大垣方言の活用を十分に記述するためには、この流れ図の規則に加えて、いくつかの附則や例外を立てる必要があるが、それらについては吉安（2021）pp.33-38を参照されたい。

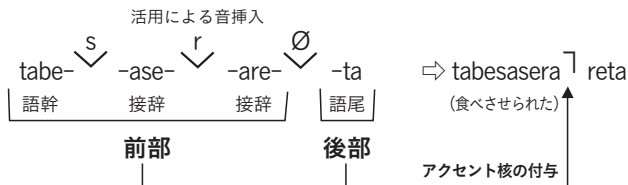
2.2. 動詞の音便形 上図中に③として示した音便⁴について、詳しく述べる。動詞における音便は、子音語幹動詞に、/l/ で始まる形態素（希望を表す接辞〈-ta-〉を除く）が結び付く場合に生じる。大垣方言における音便は、基本的には

標準語と同じであり、語幹末子音が /k/, /g/ の場合にはイ音便 (〈行く〉は例外的に促音便) が、 /t/, /r/, /w/ の場合には促音便が、 /n/, /b/, /m/ の場合には撥音便が起きる。

例外として、〈juw-〉(言う)はウ音便を起こすこともあり、例えば〈juw-〉+〈-ta〉は促音便形〈juqta〉でもウ音便形〈juuta〉(意味はいずれも(言った)に相当)でも良い。また、高年層の大垣方言⁵においては、/s/で終わる語幹もイ音便を起こすことがあり、いわゆるサ行イ音便が見られる。ただし、下例のように、/s/で終わる語幹が全てイ音便を起こしうるわけではなく⁶、しかも、イ音便を起こしうる語幹であっても、起こすか否かは常に任意である⁷。

das- + -ta → daita または dasita (出した) ……サ行イ音便の起こりうる語幹
kas- + -ta → kasita (貸した) ……サ行イ音便を起こさない語幹

2.3. 動詞のアクセント 動詞の活用による音挿入が形態素境界ごとに起きるのに対して、動詞のアクセント形成は1語につき1度だけ、語尾が付加されるときに初めて行われるものである。具体的には、語尾よりも前の部分(以下、前部)の持つアクセント素性と、語尾(後部)が何であるかによって、動詞のアクセントは決定される。

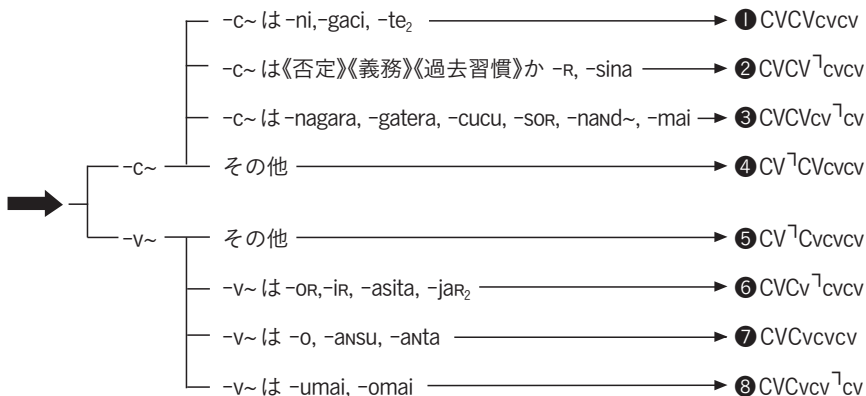


アクセント素性とは、アクセント上の振る舞いを規定する因子であり、+と-の2種類がある。基本的には時代差や地域差がなく、+アクセント素性は金田一語類の第2類、-アクセント素性は第1類にほぼ対応すると言える。大垣方言の語幹や接辞はそれぞれ+アクセント素性か-アクセント素性のいずれかを持っており⁸、前部全体のアクセント素性は、前部を構成する最末尾の形態素のアクセント素性によって決定される。例えば、上例の〈tabesaserare-〉という前部のアクセント素性は、〈tabe-〉や〈-ase-〉のアクセント素性とは関係なく、最末尾の形

態素である接辞〈-are-〉が+アクセント素性を持っているため、+アクセント素性となる。

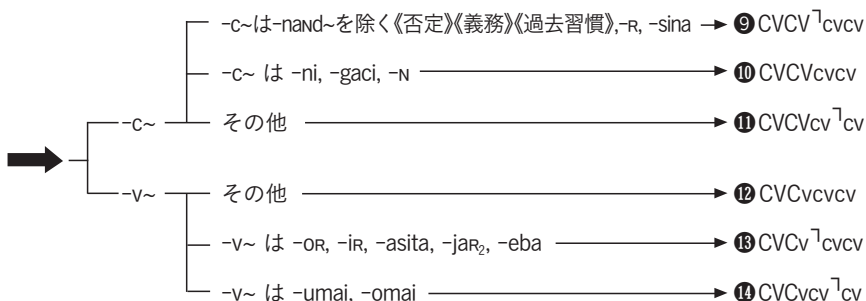
詳細な記述や例外については吉安（2021）pp.49-54を参照されたいが、このアクセント決定規則の基本的な部分を、屋名池（2005b）p.79にならって流れ図の形に整理すると、下掲の通りである。なお、図中のCやVは前部に、cやvは後部に属する音形を示す。

●前部が+アクセント素性の場合



●前部が-アクセント素性の場合

適用例として、先程の〈tabesasereta〉を取り上げると、この動詞は前部



適用例として、先程の〈tabesasereta〉を取り上げると、この動詞は前部〈tabesaserare-〉が+アクセント素性であり、後部〈-ta〉が子音始まりである。〈-ta〉は①～③のように個別指定が行われる後部ではないので、「その他」とし

て④のパターンが適用される。④は前部の後ろから2拍目がアクセント核となるので、〈tabesaserareta〉のアクセントは /tabesasera¹reta/ と決定される。

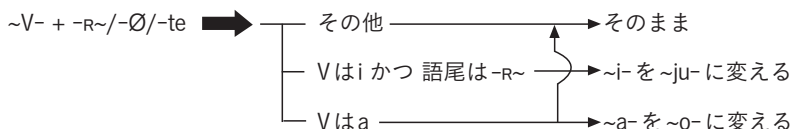
3. 形容詞の活用とアクセント

続いて、吉安（2021）pp.39-40およびpp.61-32を元に、形容詞の活用とアクセントを概観する。なお、分析の手法については、屋名池（2005a）pp.76-77に基づいた。

3.1. 形容詞の活用 形容詞の活用は原則として、語幹と語尾がそのまま結び付くという単純な仕組みである。例えば、語幹〈taka-〉に語尾〈-i〉が結び付いて〈takai〉（高い）、語幹〈oso-〉に語尾〈-kaqta〉が結び付いて〈osokaqta〉（遅かった）という語が作られる。ただし、例外的に、/a/, /i/ で終わる語幹に4種類の語尾〈-R〉〈-rte〉〈-∅〉〈-te〉⁹が付く場合にはウ音便が起こる。大垣方言における形容詞のウ音便形は、不規則形容詞を除くと、語幹末母音別に下表のようである。

語幹末母音	/a/	/i/	/u/	/o/
語幹例	taka- 〈高い〉	orki- 〈大きい〉	hiku- 〈低い〉	oso- 〈遅い〉
-R	takor	orkjur	hikur	osor
-rte	takorte	orkjurte	hikurte	osorte
-∅	taka, tako	orki	hiku	oso
-te	takate, takote	orkite	hikute	osote

また、このようなウ音便形を導く処理を流れ図の形に整理すると、下図のようになる。



3.2. 形容詞のアクセント 大垣方言における形容詞は、金田一語類の第1類が第2類に合流しており、語幹は全て+アクセント素性を持つ。したがって、アクセントに語幹は影響を与えず、アクセントは語尾によって以下の5種類のいずれかになる。

アクセント		語尾	例〈taka-〉
I	CVCVcvcv	-karo, -∅	タカカロ
II	CV ¹ CVcvcv	-te	タ ¹ カテ
III	CVCV ¹ cvcv	-i, -R, -te, -Rte, -ku, -kute	タカ ¹ イ
IV	CVCVc ¹ v ¹ cvcv	-kaQta, -kaQte, -kaQtara, -kaQtari	タカカ ¹ ツタ
V	CVCVcvcv ¹ cv	-karOR	タカカロ ¹ ー

ただし、語尾〈-te〉のアクセントは、II型とIII型の間で揺れている。ただし、語幹末母音が/i/のときには、語幹末音節が/ki/か/ci/であればIII型となり、/si/か/zi/であればII型となる傾向が見られる。以下に例を示す。なお、表中のダッシュは該当語がないことを、丸括弧はその形の使用頻度が比較的低いことを示す。

語幹末	II型		III型	
	3拍	4拍	3拍	4拍
a	タ ¹ カテ	ミジ ¹ カテ	タカ ¹ テ	ミジカ ¹ テ
	タ ¹ コテ	ミジ ¹ コテ	タコ ¹ テ	ミジコ ¹ テ
ki	—	(オ ¹ ーキテ)	—	オーキ ¹ テ
ci	—	(バ ¹ ッチテ)	—	バッチ ¹ テ
si	オ ¹ シテ	ウレ ¹ シテ	(オシ ¹ テ)	(ウレシ ¹ テ)
zi	—	ヒモ ¹ ジテ	—	(ヒモジ ¹ テ)
u	ヒ ¹ クテ	アカ ¹ ルテ	ヒク ¹ テ	アカル ¹ テ
o	オ ¹ ソテ	カシ ¹ コテ	オソ ¹ テ	カシコ ¹ テ

第2部 動詞音便形とアクセント

大垣方言においては、動詞の音便形に特異なアクセントが現れる場合がある。特に/k/, /g/, /s/で終わる動詞の語幹（以下、KGS語幹）は、その音便形を中心として、アクセント上、特異な振る舞いを示す。以下では、KGS語幹の特異性に着目しつつ、動詞音便形に関わるアクセント現象について、記述と検討を行う。

4.1. KGS語幹のアクセント素性 2.3節で述べたように、金田一語類の第1類に

属する動詞の語幹は、基本的に時代や地域を問わず－アクセント素性を持つ。しかし、大垣方言においては、第1類に属するKGS語幹が、＋アクセント素性を持つことがある。この現象は、若年層の大垣方言では一部のKGS語幹に限られるが、高年層の大垣方言では、ほとんどのKGS語幹が＋アクセント素性を持っている。例えば、2拍1類動詞〈向く〉は頭高型で、3拍1類動詞〈こなす〉は中高型で発音される。ただし、高年層の大垣方言にあっても、2拍1類のKGS語幹には、－アクセント素性を持つもの¹⁰が一部存在する。例えば、〈ok-〉(置く)や〈kas-〉(貸す)は、高年層でも若年層でも－アクセント素性を持つ。

4.2. 動詞音便形における特異なアクセント 大垣方言において、音便を引き起こす語尾には〈-ta〉〈-te₁〉〈-te₂〉〈-tara〉〈-tari〉の5種類がある。このうち、〈-ta〉〈-te₁〉〈-tara〉〈-tari〉の4種類は、第2章で述べたアクセント形成の原則では説明のできないアクセントを実現させることがある¹¹。

－アクセント素性を持つKGS語幹にこれらの語尾が付くと、下掲のような2種類のアクセントで実現する。2種類のアクセントのうち、左側に示したものは、アクセント形成の原則(①CVCVcv¹cv)に従った規則的なもの¹²だが、右側に示したアクセントは、その原則で説明の付かない特異なものである。また、⊕および⊖は、語幹のアクセント素性を示す。

- ⊖ ok- + -ta → /オイタ=/ または /オ¹イタ/ (置いた)
 ⊖ cug-¹³ + -ta → /ツイダ=/ または /ツ¹イダ/ (継いだ)
 ⊖ kas- + -ta → /カシタ=/ または /カ¹シタ/ (貸した)
- ⊖ ok- + -tara → /オイタ¹ラ/ または /オ¹イタラ/ (置いたら)
 ⊖ cug- + -tara → /ツイダ¹ラ/ または /ツ¹イダラ/ (継いだら)
 ⊖ kas- + -tara → /カシタ¹ラ/ または /カ¹シタラ/ (貸したら)

同様の現象は、語幹〈juw-〉(言う)にも生じる。ただし、2.2節で述べたように、〈juw-〉に音便を起こす語尾が付く場合、促音便形とウ音便形とが併用される。〈juw-〉はこの点でKGS語幹と異なっており、促音便形の場合には規則的なアクセントしか現れず、ウ音便形の場合には特異なアクセントしか現れないとい

う特徴を有す。

- ⊖ juw- + -ta → /ユッタ=/ または /ユ¹ウタ/ (言った)
⊖ juw- + -tara → /ユッタ¹ラ/ または /ユ¹ウタラ/ (言ったら)

4.3. 動詞音便形の特異なアクセントの解釈 上述の特異なアクセントは、「イ音便またはウ音便によって連母音が生じた場合には、その位置にアクセント核を実現する」という、かつて存在したアクセント規則の名残と解釈することができる。実際に上掲の例では、/カ¹シタ/、/カ¹シタラ/を除けば、すべて音便によって生じた/oi/、/ui/、/uu/ という連母音の間に、アクセント核が置かれている。

連母音を含んでいない/カ¹シタ/、/カ¹シタラ/については、現在ではイ音便を起こさないものの、過去にはイ音便を起こして*/カ¹イタ/、*/カ¹イタラ/のように発音されていた時代が存在し、/ai/ という連母音が含まれていたと考えられる。現代大垣方言においては、〈kas-〉のような/s/で終わる語幹におけるイ音便、いわゆるサ行イ音便は、高年層から時おり聞かれるという程度にまで衰退している。しかし、大正期には「大部分のサ行動詞〔の完了形〕はイで終わる形を取る」(杉崎・植川(2003) p.333) 状況であったことなどから、大正期よりも前には、/s/で終わる語幹のほぼ全てがイ音便を起こすような時代が存在したと推測される。このことから、前節で述べたような動詞音便形の特異なアクセントは、ほぼ全てのKGS語幹がイ音便を起こしていた時代に存在した、「イ音便またはウ音便によって連母音が生じた場合には、その位置にアクセント核を実現する」というアクセント規則の名残として解釈することができるのである。

4.4. 第1類のKGS語幹が+アクセント素性を持つ理由 +アクセント素性を持つ語幹の音便形に語尾〈-ta〉〈-te_i〉〈-tara〉〈-tari〉が付いた場合のアクセントは、アクセント形成の原則(④CV¹CVcvcv)に従って、語尾が1拍の場合には後ろから3拍目に、語尾が2拍の場合は後ろから4拍目にアクセント核が置かれる。これらのアクセント核の位置は、下例に示すように、これまで論じてきた特異なアクセントにおけるアクセント核の位置と同じである。

- ⊕ kak- + -ta → /カ¹イタ/ (書いた) cf. ⊖/オ¹イタ/ (置いた)

⊕ mat- + -ta → /マ¹ッタ/ (待った) ⊖ /ツ¹イダ/ (継いだ)
 ⊕ kam- + -ta → /カ¹ンダ/ (噛んだ) ⊖ /カ¹シタ/ (貸した)

⊕ kak- + -tara → /カ¹イタラ/ (書いたら) cf. ⊖ /オ¹イタラ/ (置いたら)
 ⊕ mat- + -tara → /マ¹ツタラ/ (待ったら) ⊖ /ツ¹イダラ/ (継いだら)
 ⊕ kam- + -tara → /カ¹ンダラ/ (噛んだら) ⊖ /カ¹シタラ/ (貸したら)

4.1節において、高年層の大垣方言では、金田一語類の第1類に属するKGS語幹のほとんどが、-アクセント素性ではなく+アクセント素性を持っていることを述べた。これは、もともと-アクセント素性を持っていたKGS語幹が、+アクセント素性へと転じたことを意味する。その原因は、-アクセント素性を持つKGS語幹の音便形と、+アクセント素性を持つ語幹の音便形とが、同じアクセント形で実現するという、先述の状況にあったのではなかろうか。つまり、-アクセント素性を持つKGS語幹のアクセント素性が、その音便形の特異なアクセント形に基づいて+アクセント素性であると「再解釈」された結果、そのようなアクセント素性の変化が起きたものと考えられるのである。

ただし、2拍のKGS語幹の一部が-アクセント素性に留まっていることについては、使用頻度の高い動詞が「再解釈」を免れた可能性が考えられる。また、ウ音便を起こす〈言う〉や、かつてウ音便を起こしたと考えられる/w/で終わる語幹¹⁴には、アクセント素性の変化が見られない¹⁵。このことは、使用頻度の高い動詞が「再解釈」を免れた可能性に加えて、動詞のウ音便が衰退した後に「再解釈」が起きた可能性を示唆するものではなかろうか。

第3部 補助用言とアクセント

大垣方言においては、用言に補助用言が付加されるときにも、既存の考え方で説明の難しいアクセントが現れることがある。次に、そのような場合について記述と検討を行う。

5. 補助動詞のアクセント

大垣方言においては原則として、補助動詞は語尾〈-te₂〉で終わる動詞の後ろ

に付加される¹⁶。なお、〈-te₂〉で終わる動詞のアクセントは、2.3節で扱ったアクセント形成の規則に従って常に平板型である。また、補助動詞自体も、通常の動詞と同じ規則によって形成されるアクセントを独立に持っている。

/カ¹イテ¹ = / + /ミ¹ル/ → /カ¹イテ = ミ¹ル/ (書いてみる)
 /カ¹イテ¹ = / + /ゴザ¹ッタ/ → /カ¹イテ = ゴザ¹ッタ/ (書いていらっしまった)

例外的なアクセントを示すものに、「～てしまう」を意味する補助動詞〈まう〉がある。補助動詞〈まう〉が付加された場合の先行動詞のアクセントは、〈-te₂〉では説明することができない。具体的には、以下のようなアクセントが現れる。なお、先行動詞のアクセント素性によってアクセント形が異なるため、両素性の場合について例を示す。

⊕ /カ¹イテ¹ / + /マウ¹ = / → /カ¹イテ マウ¹ = / (書いてしまう)
 ⊖ /ウッテ¹ / + /マウ¹ = / → /ウッテ¹ マウ¹ = / (売ってしまう)
 ⊕ /カ¹イテ¹ / + /マッタ¹ラ / → /カ¹イテ マッタ¹ラ / (書いてしまったら)
 ⊖ /ウッテ¹ / + /マッタ¹ラ / → /ウッテ¹ マッタ¹ラ / (売ってしまったら)

この特異なアクセントを説明するには、前部が+アクセント素性であれば後ろから3拍目に、-アクセント素性であれば最後の拍にアクセント核¹⁷が置かれる語尾〈-te₃〉を新たに設ける必要がある。しかし、補助動詞〈まう〉のアクセントを説明するためだけに〈-te₃〉を設けることの是非については検討の余地がある。というのも、〈-te₃〉を語尾に持つ動詞は、補助動詞〈まう〉の前でしか使用されることがない。つまり、第1章で示した、語の特性のうち、「[アクセント単位]である」と「[最小呼気段落]である」という特性は持っているものの、「単独使用が可能」という特性は持っていないのである。そのため、〈-te₃〉で終わる動詞を語と認めることには問題があると言わざるを得ない。このように、大垣方言の補助用言まわりのアクセントにおいては、アクセント単位・最小呼気段落でありながら単独使用ができないという、形態素と語の中間的存在が観察される。

6. 補助形容詞のアクセント

補助動詞と同様に、補助形容詞も、通常の形容詞と同じ規則に従って決定されるアクセントを独立に持っている。したがって、本章が記述および検討の対象とするのは、補助形容詞の付加とアクセントの関係である。

補助形容詞は様々な用言に付加されるが、アクセントについては原則として、先行用言と補助形容詞の両方のアクセントが保たれる。例を挙げれば、次の通りである。

/カ¹イテ/ + /エ¹ー/ → /カ¹イテ エ¹ー/ (書いてよい)
/カイテ=/¹⁸ + /ホシ¹イ/ → /カイテ= ホシ¹イ/ (書いてほしい)
/カカ¹ンデ/ + /エ¹ー/ → /カカ¹ンデ エ¹ー/ (書かなくてよい)
/タカ¹ク/ + /ナ¹イ/ → /タカ¹ク ナ¹イ/ (高くない)
/タコ¹ー/ + /ナ¹イ/ → /タコ¹ー ナ¹イ/ (同上)

この原則に対する例外としては、次の2種類がある。1つは、〈-Ø〉を語尾とする形容詞に補助形容詞〈ない〉を付加する場合である。

/タカ= + /ナ¹イ/ → /タ¹カ ナ¹イ/ または/タカ¹ナイ/ (高くない)
/タカ= + /ナカ¹ッター/ → /タ¹カ ナカ¹ッター/ または/タカ¹ ナカ¹ッター/
(高くなかったら)

このうち、/タカ¹ナイ/に限っては、アクセント単位であり最小呼気段落でもあるので、1語として扱うことができる。この場合はⅢ型の語尾〈-nai〉を認めることで、そのアクセントが説明できる。しかしながら、それ以外の3つは、先行形容詞と補助形容詞とが、アクセント単位としても最小呼気段落として独立している。両形容詞のうち、補助形容詞側のアクセントは通常の形容詞〈ない〉のアクセントと同じであるので、上例における〈ない〉や〈なかつたら〉を独立の語と解釈することには問題がない。一方で、先行形容詞側については、Ⅱ型あるいはⅢ型のアクセントで実現する〈-Ø₂〉を新たに認めなければ説明ができないが、この語尾で終わる形容詞が、単独使用されることはない。ここでも第5章と

同様、アクセント単位でありながら単独使用不可能な存在を想定する必要が生じてくる。

もう1つは、打消の語尾〈-heN〉で終わる動詞に関わるものである。下例のように、中年層以下の大垣方言では、〈-heN〉で終わる動詞に形容詞の語尾を付けることができる。この形式について、吉安（2021）p.64では、〈-heN〉で終わる動詞に〈Ø-〉という無音の語幹を持つ補助形容詞が付いているものと解釈して記述した。

／カカ¹ヘン／ + ／カ¹ッタ／ → ／カカ¹ヘン カ¹ッタ／ （書かなかった）
／カカ¹ヘン／ + ／クテ＝／ → ／カカ¹ヘン クテ＝／ （書かなくて）

しかし、当然ながら〈かった〉や〈くて〉は単独で使うことが不可能であり、語とは認め難い。ここでもまた、アクセント単位でありながら単独使用不可能な存在、すなわち、語単位とアクセント単位が一致しない場合があることを認めざるを得ないということになるのではないだろうか。反対に、もしそうした存在を認めないとすれば、特定の2形態の組み合わせにおいてのみ現れるアクセント形や、それを作り出す規則の存在を認めなければならないことになるだろう。

おわりに

本稿では、音便形と補助用言のアクセントに関する問題を中心に、大垣方言における用言の活用とアクセントについて記述と検討を行った。音便形のアクセントについては、その一見例外的なアクセントの現れ方が、連母音を生じる音便形に共通して適用されていた規則の名残であり、アクセント素性の変化を引き起こす原因にもなったことを論じた。補助用言のアクセントについては、アクセント単位でありながら単独使用不可能な存在、いわば形態素と語の中間的存在を設定すべき可能性について指摘した。こうした存在を理論的にどう位置付けるかについては、更なる検討を続けたい。

注

- 1 本稿が扱う大垣方言には、昭和期に合併した旧不破郡域（おおよそ杭瀬川以西）や、2006年に合併した旧上石津町および旧墨俣町の方言は含まない。山口（1987）によれば、大垣市の旧市域と旧不破郡域ではアクセントが異なっている。
- 2 大垣方言の主な接辞を挙げておく。各接辞の後ろには語幹〈jom-〉（読む）を用いて大垣方言での使用例（カタカナ）を示し、標準語で用いられない接辞については、標準語訳をスラッシュの後ろに付した。なお、2.3節で扱うアクセント素性の情報も付しておく。+アクセント素性の接辞：〈-are-〉（ヨマレル）、〈-aqse-〉（ヨマッセル／お読みになる）、〈-anse-〉（ヨマンセヘン／お読みにならない）、〈-e-〉（ヨメル）、〈-ase-〉（ヨマセル）、〈-ere-〉（ヨメレル／読める）、〈-tar₁-〉（ヨンダル／読んでいる）、〈-taruk-〉（ヨンダルク／あちこちで読む）、〈-tor-〉（ヨンドル／読んでいる）、〈-jagar-〉（ヨミヤガル）、〈-karakas-〉（ヨミカラカス／読みまくる）、〈-jor-〉（ヨミヨル／読みやがる）、〈-mas-〉（ヨミマス）。-アクセント素性の接辞：〈-tar₂-〉（ヨンダル／読んでやる）、〈-tek-〉（ヨンデク／読んでいく）、〈-temaw-〉（ヨンデマウ／読んでもらう）、〈-tage-〉（ヨンダゲル／読んであげる）、〈-tere-〉（ヨンデレル／読んでいらっしやる）、〈-toide-〉（ヨンドイデル／読んでいらっしやる）、〈-tok-〉（ヨンドク／読んでおく）、〈-ntok-〉（ヨマントク／読まないでおく）。ただし、〈-tage-〉〈-tere-〉〈-toide-〉〈-tok-〉〈-ntok-〉は、〈-n〉〈-u〉以外の語尾に続く場合には+アクセント素性として働く。
- 3 注2と同様に、大垣方言の主な語尾を挙げておく。+アクセント素性の語幹〈jom-〉（読む）と-アクセント素性の語幹〈ur-〉（売る）を用いて使用例（カタカナで表記し、アクセントも示す）を示し、標準語にない語尾については、〈ur-〉に付いた場合の標準語訳をスラッシュの後ろに付した。なお、アクセントが無核型（平板型）の場合は、末尾に等号（=）を付して明示した。〈-n〉（ヨマ¹ン・ウラン=／売らない）、〈-hen〉（ヨマ¹ヘン・ウラ¹ヘン／同左）、〈-sen〉（ヨマ¹セン・ウラ¹セン／同左）、〈-nanda〉（ヨマナ¹ンダ・ウラナ¹ンダ／売らなかった）、〈-henanda〉（ヨマ¹ヘナンダ・ウラ¹ヘナンダ／同左）、〈-senanda〉（ヨマ¹セナンダ・ウラ¹セナンダ／同左）、〈-nande〉（ヨマナ¹ンデ・ウラナ¹ンデ／売らなくて（過去））、〈-henande〉（ヨマ¹ヘナンデ・ウラ¹ヘナンデ／同左）、〈-senande〉（ヨマ¹セナンデ・ウラ¹セナンデ／同左）、〈-nandara〉（ヨマナ¹ンダラ・ウラナ¹ンダラ／売らなかったら）、〈-henandara〉（ヨマ¹ヘナンダラ・ウラ¹ヘナンダラ／同左）、〈-senandara〉（ヨマ¹セナンダラ・ウラ¹セナンダラ／同左）、〈-nandari〉（ヨマナ¹ンダリ・ウラナ¹ンダリ／売らなかつたり）、〈-henandari〉（ヨマ¹ヘナンダリ・ウラ¹ヘナンダリ／同左）、〈-senandari〉（ヨマ¹セナンダリ・ウラ¹セナンダリ／同左）、〈-na〉（ヨマ¹ナ・ウラ¹ナ／売らなければ）、〈-nde〉（ヨマ¹ンデ・ウラ¹ンデ／売らなくて）、〈-nto〉（ヨマ¹ント・ウラ¹ント／同左）、〈-hento〉（ヨマ¹ヘント・ウラ¹ヘント／

同左)、〈-sento〉(ヨマ¹セント・ウラ¹セント／同左)、〈-zuni〉(ヨマ¹ズニ・ウラ¹ズニ)、〈-mai〉(子音語幹動詞には付かない。参考：⊕デマ¹イ・⊖ネマ¹イ／出まい・寝まい)、〈-umai〉(ヨムマ¹イ・ウルマ¹イ)、〈-nan〉(ヨマ¹ナン・ウラ¹ナン／売らなければならない)、〈-naran〉(ヨマ¹ナラン・ウラ¹ナラン／同左)、〈-nakan〉(ヨマ¹ナカン・ウラ¹ナカン／同左)、〈-nnan〉(ヨマ¹ンナン・ウラ¹ンナン／同左)、〈-nnaran〉(ヨマ¹ンナラン・ウラ¹ンナラン／同左)、〈-ta〉(ヨ¹ンダ・ウッタ)、〈-tara〉(ヨ¹ンダラ・ウッタ¹ラ)、〈-tari〉(ヨ¹ンダリ・ウッタ¹リ)、〈-te₁〉(ヨ¹ンデ・ウツテ=)、〈-te₂〉(ヨンデ=・ウツテ= (依頼))、〈-o〉(ヨモ=・ウロ=／売ろう)、〈-or〉(ヨモ¹-・ウロ¹-)、〈-omai〉(ヨモマ¹イ・ウロマ¹イ／売ろう (勧誘))、〈-e/o〉(ヨ¹メ・ウレ=)、〈-ir〉(ヨミ¹-・ウリ¹-／売りなさい)、〈-r₁〉(同左)、〈-ansu〉(ヨマンス=・ウランス=／お売りになる)、〈-anta〉(ヨマンタ=・ウランタ=／お売りになった)、〈-asita〉(ヨマ¹シタ・ウラ¹シタ／同左)、〈-ja〉(ヨ¹ミヤ・ウリヤ=／売れば)、〈-jar₁〉(ヨ¹ミヤ¹・ウリヤ¹-／同左)、〈-jar₂〉(ヨミヤ¹-・ウリヤ¹-／売ったら？ (進言))、〈-eba〉(ヨ¹メバ・ウレ¹バ)、〈-joqta〉(ヨミ¹ヨッタ・ウリ¹ヨッタ／売ったものだ (過去の習慣))、〈-joqte〉(ヨミ¹ヨツテ・ウリ¹ヨツテ／売ったもので (過去の習慣))、〈-nagara〉(ヨミナ¹ガラ・ウリナ¹ガラ)、〈-sina〉(ヨミ¹シナ・ウリ¹シナ)、〈-gatera〉(ヨミガ¹テラ・ウリガ¹テラ)、〈-cucu〉(ヨミツ¹ツ・ウリツ¹ツ)、〈-sor〉(ヨミソ¹-・ウリソ¹-)、〈-gaci〉(ヨミガチ=・ウリガチ=)、〈-ni〉(ヨミニ=・ウリニ=)、〈-u〉(ヨ¹ム・ウル=)、〈-∅〉(ヨ¹ミ・ウリ= (連用中止法))。

- 4 音便の形態音韻論的な記述方法については屋名池 (1995) に譲り、ここでは現象の報告に留める。
- 5 筆者の祖母 (大垣方言母語話者、70代) をインフォーマントとする調査に基づいて記述する。
- 6 イ音便の可否については、吉安 (2021) pp.75-82において、語幹のsで終わる動詞 (サ行五段動詞) 211語が調査されている。その結果から、サ行変格動詞から転じたサ行五段動詞、語幹末音節の母音が /e/ であるサ行五段動詞、無核型で2拍のサ行五段動詞はイ音便を起こさず、反対にいわゆる「-カス」型動詞は全てイ音便を起こしうることが分かっている。具体例等は吉安 (2021) p.12を参照されたい。
- 7 〈落ちる〉については、母音語幹動詞としての規則的な語形 〈ocita〉 〈ocite〉 等に加えて、〈oqta〉 〈oqte〉 のような語形も用いられる。これらは一見例外的に見えるが、〈落ちる〉を 〈oci-〉 〈ot-〉 という2つの語幹を持つ複語幹動詞と認めれば、〈ot-〉 の規則的な音便形と考えることができる。
- 8 東京方言においては、ヴォイスに関わる接辞は「自身が+/-の特性をもたない接辞」(屋名池 (2005b) p.78) であり、その直前の形態素のアクセント素性を通すが、大垣方言には原則としてそのような接辞は存在しない。ただし、若年層の大垣方言においては、東京方言と同様に、一部の接辞がアクセント素性を持たない場合

- もある。詳細は吉安（2021）pp.46-47およびp.50を参照されたい。
- 9 <-r> <-∅> は標準語の <-ku> に、<-rte> <-te> は標準語の <-kute> に相当する。
- 10 金田一（1974）p.67に挙げられている2拍1類のカ行・ガ行・サ行五段動詞のうち、<明く> <置く> <聞く> <敷く> <焚く> <泣く> <鳴く> <履く> <引く> <弾く> <退く> <焼く> <行く> <沸く> <湧く> は無核型（-アクセント素性）であり、他は有核型（+アクセント素性）である。
- 11 <-te₂> は、<ちょっとこち来て> のように聞き手に依頼をする場合や、補助動詞が後続する場合に用いられる語尾であり、<-te₁> とは違って常に規則的なアクセントを示す。
- 12 <-ta> のような1拍の語尾を①に当てはめると、語末よりも後ろにアクセント核の位置が指定されることになる。このような場合、そのアクセント核は実現せず、語のアクセントは無核型となる。
- 13 <cuɡ- > を-アクセント素性として扱う話者は、中年層以下に限られる。高年層においては、/ɡ/ で終わる語幹は全て+アクセント素性である。
- 14 大正期の大垣方言を扱う杉崎・植川（2003）p.333によって <会う> が、昭和期の大垣方言を扱う奥村（1976）p.209によって <酔う> が、かつてウ音便を起こしたことが知られる。
- 15 <添う> <問う> <結う> など、金田一語類の第1類に属していながら+アクセント素性を持つ /w/ 終わり語幹も少数存在するが、語彙的な例外と見てよかろう。
- 16 吉安（2021）p.59では語尾 <-te₁> で終わる動詞に付加されるとしたが、<-te₂> とすることにより、追加の規則を設けることなくアクセントが説明できるので、本稿では修正した。
- 17 大垣方言では東京方言や名古屋方言と同様に、頭高型の語を除いて句頭が低く発音されることがある。しかし、-アクセント素性の先行動詞と <まう> の間にあるアクセント核は、<まう> の句頭音調を反映したものではない。両者を連続して発音して句頭音調が現れない環境にしても、必ずこの位置で音が下がる。また、仮に音を下げずに /ウツテマウ=、/ウツテマッタ¹ラ/ と発音すると、「売ってもらう」「売ってもらったら」という別の意味になってしまうことから、これが意味の区別に関わるアクセント核であるということが言える。
- 18 吉安（2021）p.62ではこの語尾を <-te₁> と解釈しているが、<-te₂> と解釈すれば追加の規則を設けることなくアクセントが説明できるので、本稿では修正した。

参考文献

- 奥村三雄編（1976）『改訂増補岐阜県方言の研究』（1988年の再版）大衆書房
 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
 杉崎好洋・植川千代（2003）『美濃大垣方言辞典』第2版 美濃民俗文化の会

- 屋名池誠 (1992) 「上方ことばのアクセント」『上方の文化 上方ことばの今昔』和泉書院 pp.1-59
- 屋名池誠 (1995) 「「音便形」——その記述」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院 pp.1107-1130
- 屋名池誠 (2005a) 「活用の捉え方」『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.71-77
- 屋名池誠 (2005b) 「活用とアクセント」『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.78-80
- 屋名池誠 (2018) 「忘れられた分かち書き方式——その再評価」『ことばと文字』10 pp.114-122
- 山口幸洋 (1987) 「岐阜県下のアクセント——愛知・岐阜のアクセント（後編）——」『名古屋・方言研究会会報』4 pp.10-24
- 吉安良太 (2021) 『大垣方言の形態音韻論的分析』慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻国文学分野修士論文（慶應義塾大学学術情報リポジトリ (KOARA) にて公開予定）